

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

***** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。
無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 学術俯瞰講義
Copyright 2015, 小島 毅

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series
Copyright 2015, Tsuyoshi Kojima

東アジア海域の 文化交流と 寧波

小島 毅

2015.5.8

B

- 愛 美：友達の住んでいた団地にはたくさんの日系ブラジル人が住んでいたよね。
日本町って、あの団地や横浜の中華街みたいだったのかな。中華街といえ
ば、江戸時代の長崎には中国人が住む唐人屋敷があったと教わったわ。
- 智 史：中世にも人の往来は盛んだったよ。たとえば、①鎌倉の禅宗寺院などは
中国語が飛び交っていたと言われている。南宋や元の僧が渡来し、北条氏
の帰依を受けて滞在していた。
- 愛 美：とか無学祖元ね。
- 智 史：そうだよ。さらに時代をさかのぼると、平安中・後期のには宋の
商人が来航して交易に携わっていたんだよ。
- 愛 美：そうなの？ 894年に遣唐使が廃止されて、日本は国風文化の時代になっ
たと教わったけど。
- 智 史：平安京跡からは、中国各地で作られた陶磁器が出土しているし、『源氏物
語』には、中国をはじめとする外国からの舶来品が「唐物」として出てくる
よ。
- 愛 美：ちょっと意外だなあ。遣隋使や遣唐使が中国の文化や技術をもたらしたこ
とは知っていたけど。
- 智 史：遣隋使や遣唐使だけではないよ。②朝鮮半島との交流も忘れてはいけな
いし、東アジアの動乱を逃れて移住した人々もいたんだ。
- 愛 美：日本列島の歴史のなかには、海を越えたさまざまな人の往来があったの
ね。

問 4 空欄 に入る語句の組合せとして正しいものを、次の①～④
のうちから一つ選べ。

- ① ア 蘭溪道隆 イ 博 多
② ア 蘭溪道隆 イ 堺

*

日本史B

問 5 下線部㉑に関して述べた文として誤っているものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 17

- ① 南朝の後亀山天皇から北朝の後小松天皇に譲位する形で、南北朝の合一を行った。
- ② 息子の基氏を鎌倉公方として、関東に派遣した。
- ③ 有力守護である山名氏清と大内義弘を滅ぼし、権力の集中をはかった。
- ④ 京都の室町に花の御所とよばれる邸宅を造営し、そこで政治を行った。

問 6 下線部㉒に関連して、中世における日本と中国との交流に関して述べた次の文Ⅰ～Ⅲについて、古いものから年代順に正しく配列したものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。 18

- Ⅰ 中国から渡来した蘭溪道隆が、北条時頼の帰依を得て建長寺を開いた。
- Ⅱ 中国から帰国した栄西が、禅宗の一派である臨済宗を伝えた。
- Ⅲ 大内氏の遣わした使節と細川氏の遣わした使節とが、中国の寧波で衝突した。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| ① Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ | ② Ⅰ－Ⅲ－Ⅱ | ③ Ⅱ－Ⅰ－Ⅲ |
| ④ Ⅱ－Ⅲ－Ⅰ | ⑤ Ⅲ－Ⅰ－Ⅱ | ⑥ Ⅲ－Ⅱ－Ⅰ |

*

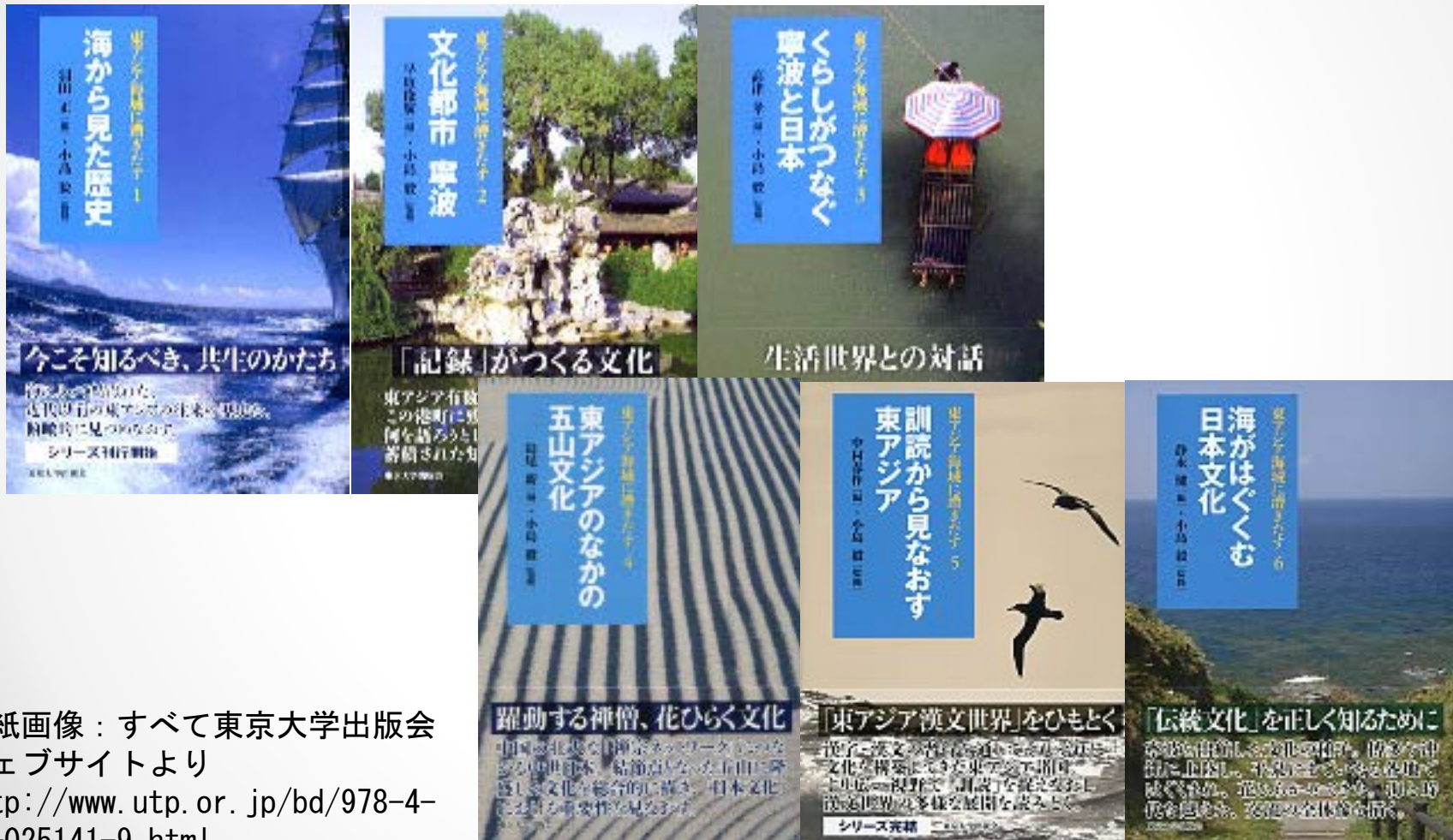
寧波の乱（1523）

- 日本は15世紀はじめから明に朝貢使節団を派遣していた
- 応仁の乱以降、室町殿の権威・権力が衰える
- 細川氏と大内氏がそれぞれ独自に遣明船を派遣
- どちらがホンモノかをめぐって騒乱となった

寧波の位置



東アジア海域に漕ぎだす



*
表紙画像：すべて東京大学出版会
ウェブサイトより
<http://www.utp.or.jp/bd/978-4-13-025141-9.html>

東アジア海域に漕ぎだす2

文化都市 寧波

- 第Ⅰ部 書物がつくる文化 一 天一閣蔵書楼とは何か 二 寧波の郷土史料『四明叢書』 三 語り継がれる記憶と寧波の地方志 四 思想家の言葉はどのようにして書籍に定着したのか——王陽明 を一例として コラム 「中国のルソー」を育んだもの 第Ⅱ部 知識人たちの記憶と記録 一 王朝をこえて——宋元交代期の碑刻の書き手たち 二 豊氏一族と重層する記憶 三 思想の記録／記録の思想——寧波の名族・万氏について 四 寧波という磁場と文学者たち コラム 江戸文化と朱舜水 第Ⅲ部 場と物が織りなす記憶と記録 一 石に刻まれた処方箋 二 墓地をめぐる記憶と風水文化 三 文化を支える経済のはなし コラム 東銭湖墓群と史氏 コラム 寧波の英雄・張煌言

朱舜水先生終焉之地 碑



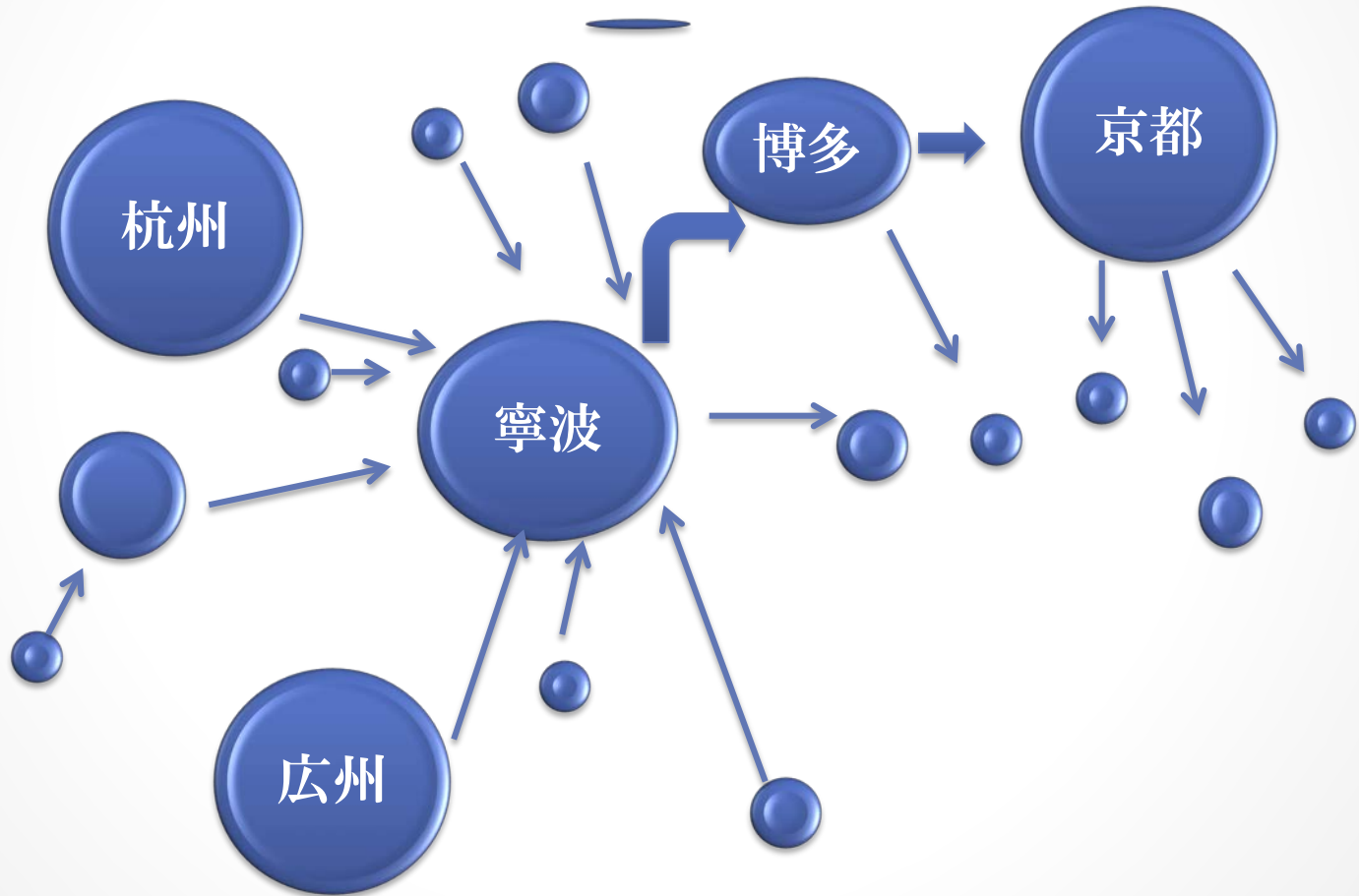
ハチ公と上野英三郎博士像



東アジア海域に漕ぎだす3 くらしがつなぐ寧波と日本

第Ⅰ部 「水の世界」 寧波の環境と社会 一 「水郷」 寧波の生活 二 「港町」 寧波の人々 第Ⅱ部 歩いて実感する浙江の生活文化 一 お茶のふるさとを求めて 二 浙江東部の伝統演劇 三 浙江地域の「船上生活者」 第Ⅲ部 いざ、寧波から海を越えて 一 海を渡る石 二 海を越える**神々** 三 近代寧波の商人と日中貿易

ハブとしての寧波



ハブとしての寧波

- 9世紀以降、中国における対日通航は明州が指定される
- 明州 → 慶元府 → 寧波
- 宋風文化は寧波を経由して伝来
- 禅仏教・禅宗様建築・喫茶文化・水墨画・三体詩
- 朱子学も禅寺のなかで学習される形態で伝わる

北山文化 と 東山文化



Wikipedia より



Image by Oilstreet, from Wikimedia Commons (2015/05/26)
http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ginkakuji_Kyoto03-r.jpg

CC BY-SA 3.0

古代との違い

- 遣唐使時代は唐を模範とする国づくりをめざしていた
- 律令の継受、鎮護国家仏教
- 宋風文化は生活文化としての面が強い
- 寧波がある浙江地方と西日本との風土的類似
- 佐々木高明『照葉樹林文化とは何か』中央公論社、2007年
- 日本の伝統文化として定着した

宋学（朱子学）

- 宋（960~1276）において誕生した儒教の1流派
- 経書を新たな視点から読み解こうとする
- 「理」と「気」によって自然現象・人間社会を説明
- 人間社会の歴史を当為による価値判断で語る
- 大義名分
- 尊王攘夷
- 江戸時代の士道の基礎となる => 武士道

招宝山



著作権の都合により、
ここに挿入されていた写真を削除しました。

「招宝山の写真」

招宝七郎神（平戸瑞雲寺）



*

二階堂善弘「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」より
<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nikaido/zhaobaoqilang.html>

二階堂善弘氏による見解

- 招宝七郎大権は、龍神＝海神として、また伽藍神として宋から明にかけての中国で広く祀られる神であった。さらに日本では平戸にても祀られた。ところが、その後、航海守護神は福建系の媽祖神の力が強くなり、中国では伽藍神であることも忘れられ、信仰が衰退していったものと考えられる。ついには阿育王寺でも、その名すら不明確になってしまっている。
- ただ、日本において宋代の文化を伝える寺院でその像を祀ることから、信仰が僅かながら保持されたものである。民間信仰についてはその変容が激しく、恐らくは宋代の姿は全く今と違ったものであったろう。さらに東アジア一帯で海を飛び越えて信仰される海神は媽祖以外にも多様な神々があったはずである。その当時の宗教文化の一端を今に伝えるものとして、招宝七郎神は非常に貴重な存在であると考えられる。

道元（1200~1253）

- 渡宋（1223~1227年）
- 『典座教訓』（講談社学術文庫に現代語訳あり）の逸話
- 留学中のほとんどの期間を寧波の天童寺ですごす
この頃、天童寺は禅院五山の第三位に列せられていた

海域交流と日本文化

- 日本は四方を海に囲まれているため、外国との通交には海を渡らざるをえなかった。
- 大陸での上陸地点は任意ではなく、9世紀以降は中国政府によって寧波が指定されていた
- 日本から渡航する者や日本へ渡航する者はみな寧波を通過していた
- 日本人渡航者の「中国経験」は厳密には「浙江経験」「寧波経験」であった
- 拙稿「異境の表象」（アジア遊学70号特集『波騒ぐ東アジア』、2004）